

第54号 華山会報

令和7年4月11日

公益財団法人華山会

渡辺華山と立原三代（翠軒、杏所、春沙）

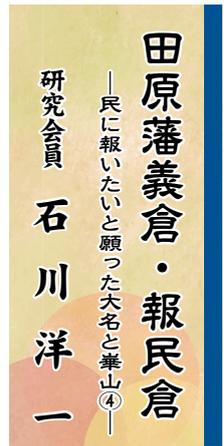
茨城県立歴史館 首席研究員 藤 和博



渡辺華山の伝記『全楽堂記伝』中、華山三十一歳即ち、文政六年（一八二三）に自省の項目たる「心の掟」を記している。四条目末に「文晁、米庵、坦齋、杏所、書画の道に深き人なれば常に益あり。交わりて楽むべし。」二つの条に13人。人好きの華山は交友も多かったが、限られた時間の中で益ある交流を優先させたかったのだろう。四人目の杏所とは、水戸出身の南画家立原杏所である。杏所と華山の交友はこの一文に代表されるように有名である。華山が後年蛮社の獄で囚われた際には

椿椿山、高久靄厓とともに救援に尽力した。また、華山との関係は、杏所の父翠軒そして長女の春沙にも及ぶ。翠軒は華山がその遺像から肖像画を描き、正本は残念ながら関東大震災で焼失したが、像主のリアルな実像を伝える稿本（重美田原市博物館蔵）が伝わっている。また春沙は十代半ばに杏所の勧めで華山に入門している。春沙はその十年後に、加賀藩主前田斉泰の正室浴姫の侍女となる。その後、年を経ずして、父杏所と師華山との永劫の別離を経験した。華山と立原家三代のつながりは、人の営為による文化の形成の意義を尽きることのない興味とともに我々に教えてくれる。

杏所が水戸や江戸を中心として、多くの人々とのつながりの中で、画を成していった。父の翠軒は、『大日本史』を編纂する彰考館の総裁を17年勤めた、藩を代表する学者であった。若い頃に徂徠学もおさめ、琴棋書画にも通暁していた。数え60で致仕（隠居）し、80で江戸で亡くなった。致仕後の20年間は、悠々自適の「文人生活」であった。谷文晁とは旧知の仲で、杏所は文化三年（一八〇六）、22歳の時に江戸で会っている。（立原翠軒『熱海紀行』）翠軒の熱海湯治につきあって、その前後に江戸にて会うというのが微笑ましい。爾後、寫山楼から画卷を借用したりしている。文化六年、『華山先生謾録』によれば、17歳の華山が文晁に入門している。同じ年、杏所は水戸で藩主治紀の御前で席画を披露している。翌年にかけて公命で袋田の滝や那珂湊の真景図を描いた。文化九年、杏所が側小姓（江戸勤務）となり、立原家は一家で江戸へ移居した。翠軒と文晁、その四哲が江戸で生きることとなってゆく。「立原翠軒像稿」の姿は無精髭の鷹揚な好々爺ながら、鋭い眼光は人の真を見抜く力を持っていた。林十江の天賦の画才然り。杏所は書物読みを好まず、学者より好きな書画の道を勧めた。おそらくは文晁を介して杏所と華山は出会い、翠軒の博識や文晁の八宗兼学の元で互いを認め、切磋琢磨したのであろう。さて、華山に入門した直後の春沙の学画がわかる「粉本画卷」（茨城県立歴史館蔵）を紐解くと雄勁な筆致や瀟灑な彩色は父譲り、「偽筆」の字も見える。美術誌『塔影』に、家事雑事で画修行の不出来を嘆く春沙の手紙への華山の返信が掲出されている。「春沙賢婦」で始まる手紙は「画事は生活の一部」という気持ちの持ちようを説く。杏所は、華山ならば物事の「真」を見極める手立てを示してくれると思ったからであろう。



二、報民倉の建設

○用地確定・役職任命・地祭

天保六年八月末日報民倉設立の趣旨が記された藩主の書簡（直書）が家中および船倉会所に呼び集められた村々庄屋に伝達された。九月七日、建設用地に屋敷地がかかる平山喜太郎、萱生源左衛門を呼び出し、替地を与えることを提示し、了承を得た。報民倉建設の直接の担当者についても「御用人方日記」天保六年九月十二日条に次のように記されている。

勤むべく申し候。（九月十二日）
 村奉行の玉置恒右衛門が、報民倉造立中の普請方に仰せ付けられ、報民倉建設についての担当責任者として任命された。なお、この年の普請方役人には稲熊補助と岡田与次右衛門がいるが、さらに足軽安平を普請方に取り立てている。続いて、九月十五日には、次の記事がある。

一、報民倉地祭金田美作へ仰せ付けられ、御初尾金百疋下され、御用掛村奉行丈左エ門、御普請方、御大工残らず立ち会いこれありの由。右相済につき、金田美作御礼として皆勤申し候、（九月十五日）

報民倉地祭、いわゆる地鎮祭が行われている。地鎮祭を執り行ったのは金田美作である。藤七原村に居住した神職・山伏一族の一人と思われる。実際の作業は、普請場の地ならしから始まる。「御用人方日記」には、九月二十三日条に、藩庁に勤務する役人に今日の帰りがけに報民倉の作事をなんとなく見回るように年寄（家老）の職務室、御用部屋から達

しが出ている。

一、退出後報民倉御普請場へ年寄、御用人、御台処席（会計閣係者）残らずまかり出て、見分、堂突（胴突）いたし候、それより御作事見分もうし候、（九月廿七日）

九月二十七日には、藩庁に勤める年寄（家老）や用人、台所席（財務担当）という役人が職場から退いた後、普請現場に罷り出、地固めのために堂突（胴突）付きをし、作事の見分をしている。

一、退出後、報民倉御場所へ御年寄、御用人どもまかり出見分石運びいたし候。もつとも草り取一人つつ召し連れ働かせ申し候、但し八右衛門下男差し支え。（九月廿九日）

九月二十九日には、年寄（家老）と用人が普請場に出向き実地見分し、石運びをしている。そして自分の家で召し抱えている草履取一人ずつ働かせている。ただし用人八木八右衛門の下男は差し支えがあつて来なかつたとある。

目次

題字「華山会報」元華山会理事

故小澤耕一氏

P ① 渡辺華山と立原三代

（翠軒、杏所、春沙）

藤和博

P ② 田原藩義倉・報民倉④

石川洋一

P ⑥ 『幽居記聞』と

『守困日歴』(一)

別所興一

P ⑩ 華山と母親栄について

大崎洋

P ⑫ 華山塾について

P ⑬ 華山会学童書道展

P ⑭ 研修視察

P ⑯ 公益財団法人華山会

田原市博物館からご案内

大崎洋

【表三】石堀作業参加者数の階層別推移（天保6年）

月	日	人数	紙以上	紙以下	左欄「徒士以下その他」の内訳	作業概略・特記事項
9	29	6	3	3	年寄・用人の召使い	石運び 召使1人×召連
10	1	7	4	3	年寄・用人の召使い	石運び 召使1人×召連
10	2	16	13	3	年寄・用人の召使い	御手伝土運申候
10	4	8	8	0		今日より始ル、徒士部屋居者へ物頭より申達される
10	5	16	14	2	足軽共終日	報民倉御場所へ罷出候、地ならし
10	6	20	18	2	足軽共終日	報民倉御場所へ罷出候、地ならし
10	7	29	26	3	足軽共終日	報民倉御場所へ罷出候、地ならし
10	8	16	14	2	足軽共終日	報民倉御場所へ罷出候、地ならし
10	9	19	17	2	足軽共終日	報民倉御場所へ罷出候、地ならし
10	11	18	16	2	下役人、中間共	土持致、石堀りだし、前日岡崎より屋根師源右衛門来る。
10	13	18	13	5	村人足	石堀出し、集める
10	14	19	15	4	中間	石堀出し、慰勞の酒
10	15	8	2	6	中間共	石堀出し、上より茶・酒、車にて石引き報民倉へ
10	16	33	28	5	小役人共	報民倉地形ならし、石堀出し、車式挺にて報民倉へ
10	17	35	21	14	中間、小役人	部屋住若手之者でつたいに罷出度指南方源左衛門へ申出、車二而石引き
10	18	27	21	6	子供、足軽	石取山江罷出御手伝、石取、石集、車三挺石積御倉迄入申候
10	19	33	29	4	子供、足軽	石取山江罷出御手伝、石取、石集、
10	20	38	28	10	小頭、足軽、中間共	石曳、石集め
10	21	29	21	8	若手、子供、足軽、中間	石取山へ御手伝石集め、石引、
10	22	22	18	4	子供、足軽、中間	石取集め
10	24	48	34	14	小役人共、足軽、中間、町役人共	車式挺二而三度々普請場江石引き、石堀、石下し、昼後車四挺二而御普請場江石曳
10	25	33	27	6	足軽、中間	石集め、御坂中央へ石落出し、報民倉地形出来今日より柱建二掛り
10	26	30	23	7	足軽、中間	石取集申候、下山掛ハ何れも曳申候、
10	27	31	28	3	神官、村役人	石集め、御酒頂戴
10	28	29	21	8	子供、足軽、中間、小役人、町村役人、宗教者	石集め、七ツ時休ミニ御酒頂戴、下山掛車四挺曳申候
10	30	25	23	2	子供、足軽、中間、小役人	石取集、御酒頂戴、下山掛車一挺大石積山口番屋迄曳申候、
11	1	47	25	22	足軽、中間、小役人、町人足	石取集、大石山口番屋より御倉まで右人数にて石運申候
11	3	15	7	8	下役人、小頭、大工、木挽	報民倉棟上、蔵王宮御祈禱
11	4	166	92	74	拜礼	蔵王宮拜礼済一統御手伝石下ッ老度二而休息神酒頂戴、今日人数惣而百六十六人之由
11	5	29	20	9	子供、足軽、中間共、小役人	石集、石運、御手伝車三挺引、萱生源左衛門若手之者子供車兩度引候、
11	6	25	17	8	足軽、中間共、小役人	若手足軽共御倉こま、御手伝、法螺貝二而呼寄セ、御用人合二而御手伝へ一斗差出ス
11	7	40	20	20	足軽、小役人、赤羽根村若見村庄屋組頭	足軽・庄屋・組頭酒差加
11	8	20	12	8	子供、足軽、中間、小役人、寺	坊主、普請方、下役冥加のため酒差出
11	9	25	16	9	子供、足軽、中間、小役人	中小姓聊酒差上、車四兩二而石御場所江入、
11	10	44	38	6	足軽、中間、小役人、神官	石下坂車四兩二而引、権現下子供御手伝七人車引、台所蔵中小姓格之者御酒差加載上
11	11	53	38	15	子供、足軽、中間、小役人、神官	御酒并雪氣二而寒二付御粥被下、下山掛車三挺引足軽方供之者ハ石落候
11	12	77	44	33	足軽、中間、小役人	石集め石運び、小役人共足軽共無難御手伝致候二付蔵王宮江神酒相備候
11	13	87	54	33	子供、足軽、中間、小役人、寺	石集め石運び、御酒粥被下
11	14	23	14	9	若見村役人4人、子供、中間共	車三挺二而兩度々御場所へ引申 仕廻車より雨天昼後ハ延引
11	15	71	41	30	子供、足軽、中間、小役人	石運び、蔵王宮御坂より車二石積曳申候
11	16	90	39	51	子供、足軽、中間、小役人	石運び、蔵王宮御坂より車二石積曳申候
11	19	75	29	46	足軽、中間、小役人	石運び御手伝
11	20	92	39	53	足軽、中間、小役人	石運び蔵王宮御坂より車二石積曳申候
11	21	32	14	18	子供、足軽、中間、小役人	石運び御手伝、雨天ニ相成昼後休ニ申候
11	22	138	69	69	子供、足軽、中間、小役人、神官	鈴木五郎兵衛前より石運、御酒御粥頂戴被仰付候、

1749 1106 643

(注) しみ、破れ、虫損などで不明瞭なものは除く。さらに以下の理由により人数や身分上の区分は概略である。

「成章館子供七人」、「小僧壹人供兩人召連」など人数の明らかな場合を除き、中間、中間共、小役人、小役人共、子供、町村役人、足軽、足軽共、若手などすべて便宜上一人としてかぞえた。

「連紙以上」には連紙格も含めたが、区分は曖昧なところがあり厳密ではない。連紙格以上と思われるもの以外は子供、宗教者などを含め「徒士以下その他」とした。

(天保6年「御用方日記」による)

作業が始まったが、当初手伝いに加わるのは自分の家で家来(草履取・下男・若党など)を召し抱えている田原藩でも限られた高位の年寄、用人たちであった。

○何なりともお手伝い

一、御納戸心得小山林治、この

たび報民倉御取立につき、冥加として御側の者一統、御医師ども一人前の儀はあいならず候得(ども欠力)、相応の御手伝なんなりともつかまつり候旨相伺い、御年寄へも申し達し、奇特の儀勝手次第いたすべく旨申し

達し候(中略) 当時御側の面々 村松百度 平山喜太郎 御医師共 小山林治 鈴木五郎兵衛 但し岡本久太夫差し加わる由 (十月二日条)

年寄・用人らの作業手伝に反応するかのようにな納戸心得役の小山林治が報民倉建築につきお側の者一統、医師を含めて冥加として一人前とはいかないが、相応のお手伝いを何なりともやりたいと作業参加を申し出ている。

一、御右筆どもこのたびの報民倉御取立につき、為冥加として御手伝申上たきの旨茂右エ門宅へ相伺い、御用部屋へ申し達し、奇特之儀勝手次第いたすべし、(後略)

一、河辺甚右エ門、奥田廣吉まかり出、このたび報民倉御取立に付、両御中小姓共御場所へまかり出、何なり共、仕りたき旨伺い出候。(十月三日)

右筆とは、祐筆とも書く文書を作成する役職である。河辺甚右衛門は中小姓、奥田廣吉は供中小姓であり、何れも士分、中下位の者であるが、次のように作業参加希望伺いが続出する。

一、出席前、報民倉御場所へ佐藤半助、市川茂右衛門、八木八

右衛門まかり出、御手伝いたし候、赤井寛右衛門、土井吉右衛門、鞍馬増右衛門、浅野忠八郎、伴和助出申候、

一、昼後も報民倉御場所へ出、佐藤半助若党召し連れ候、市川茂右衛門、八木八右衛門、雪吹伊織、三浦舎人、平山喜太郎、鈴木愚伯、渥美糺、赤井寛右衛門、土井吉右衛門、河辺甚右衛門、鞍馬増右衛門、浅野忠八郎、伴和助、近藤三太夫、岡田森助、鈴木九十九、吉住右衛門七、小原嘉三、三浦故三まかり出候、(十月七日)

年寄、用人、納戸など藩庁に勤める上級役人とその家人、普請方足輕たちで建設用地の地ならし作業が行われる。作業は、十月七日の作業から午前を意味する「出席前」と午後を意味する「昼後」と午前、午後に分かれて記載されるようになった。繁多なので【表三】を参照していただきたい。

○参加者の広がり

報民倉建設作業は、地祭の後、整

地作業が行われ、十月十五日に地形水盛りをすませ、同二十五日から柱建に掛り、十一月三日に棟上げを祝い、同六日に若手の者や足輕が土壁の下地としての木舞かきを行った。十月十一日から石掘出し作業が始まる。石は建物の土台や柱石に使われるが、建設用地の地勢は南に低い緩い斜面となっており、土留め用の石垣に多く必要とされた。しばらく報民倉整地作業と石採取作業が続く。

十月十六日、「今昼前報民倉地形御手伝の人々」が一四人、「午後石取山江石堀出候人々」一六人である(外家来三人)。彼らは中堅の武士であるが、石掘出し作業には、十月中旬以降、小役人、足輕という身分の低い者も参加するようになる。

一、萱生源左衛門報民倉普請につき御手伝にまかり出たく、もつとも痛所等もこれあり候得ども相応の御手伝仕りたく、且、部屋住若手の者もまかり出たく旨、指南方源左衛門へ申し出候旨同人申し聞き候あいだ奇特の儀勝手次第いたすべき旨御用人

前にて申し達し候、

一、山口番屋前より車にて石引き候面々、指南萱生源左衛門、指南大嶋介助、木下諄吉、萱生六左衛門、河辺五十吉、間瀬映助、岡田弥助、(十月十七日)

藩校成章館の指南役である萱生源左衛門を通じて部屋住の若手の者が、報民倉普請手伝に参加したいと願ひ出ている。さらに、「萱生源左衛門始若手前髪有之子共迄も車へ石積曳申候」と十月十九日からは成章館の生徒である十歳から十五歳くらいの前髪の子供たちも作業に加わっている。

また十月二十四日から町村役人も参加するようになる。その参加者は、十月二十九日の野田村の例を取ると、「野田村両庄屋(上野田村、下野田村)、組頭八人、元メ徳次郎、御用達金五郎、彦右衛門、百姓代式人罷出」とあり、庄屋、組頭、元メ、御用達、百姓代などの村役人と元メや御用達、豪農である。さらに、宗教者の参加があり、十月二十七日には千手院が家来三人を召し連れ、翌

二十八日にも「手人式人」を連れて手伝に出ている。

○冥加として酒寄進

石採取作業は、(田原)蔵王山の西、石取山で始まり、後半、蔵王山の南急斜面で行われるようになるが、危険な重労働だったと思われる。十月中旬頃から藩から慰勞の酒、粥、茶が振舞われる。当初は「上より茶仰せ付けられお酒下され」であったが、十一月初め頃から家中の「冥加として御酒いささか御差し加え」を願ひ出ている。【表四】

一、五郎兵衛、助五郎御側御中小姓方申し出候は、このたび御手伝の者へ日々御酒くだしおかれありがたき幸せに存じ奉り候。冥加として御酒いささか御差し加えに差し上げたき旨伺い出候につき、これまで御手伝の処、奇特に候あいだ左様の儀には及び申すまじく候得共、奇特の心底いささか差し上げ候儀は苦かるまじく候得共一応申し談じ沙汰に及ぶべき旨申し、御年寄へも申し出候処、同意につき、

【表四】石堀作業中の酒寄進

酒 酒		差出人					人数		
11	4	3	8	渡辺華山			1		
11	11	1	1	佐藤半助			1		
11	6		5	市川茂右衛門			1		
11	6		5	八木八右衛門			1		
11	7	1		伊吹伊織	三浦舎人	杉山長左衛門	村井常次郎	間瀬弘人	11
				松岡部	光用三九郎	川澄外一郎	赤井覚右衛門	二村二三二	
				鏑木矢六					
11	8		6	大島祐左衛門	金田丈左衛門	生田何右衛門	渥美礼	小川岑右衛門	5
11	9	1		村松百度	平山志右衛門	萱生玄順	鈴木愚伯	中村玄喜	21
				玉置恒右衛門	小山林治	鈴木五郎兵衛	萱生源左衛門	河辺甚右衛門	
				鞍馬増右衛門	浅野忠八郎	奥田広吉	佐野麻吉	伴和助	
				吉住右衛門七	近藤助五郎	永田祐三	岡本久太夫	本多力蔵	
				土井古左衛門					
11	9	1		山田儀作	稲熊徳助	村上孫兵衛	塩谷武左衛門	日高吉左衛門	14
				松阪安兵衛	岡田与次右衛門	長尾助六	大羽弥兵衛	近藤三太夫	
				岡田森助	戸田熊蔵	鈴木九十九	山本雅兵衛		
11	11		7	鈴木弥太夫					1
11	7		7	川澄又一郎					1
11	7		5	真木重郎兵衛					1
11	11	3	8	小役人・足軽					不詳

10 52

合計58人

酒合計 15斗 2升 酒寄進者58人 (小役人、足軽除く)

小役人足軽は、蔵王宮への寄進

勝手次第差し上げ申すべく、奇 寄進)に加わっている場合がある。 特の儀江戸表へ申し上げるべき 職域・階層間の競争意識のようなも 旨申達候、(十一月九日) のも働いていると思われるが、作業 酒寄進は当初、年寄、用人からは に参加した人々の間に何か宗教的な じまったが、瞬く間に足軽、仲間、 「冥加として」という集団意識が醸 小役人を含めほぼ全家中に波及し、 成されたとも推察される。 当日参加の村役人までも酒差加(酒 作業は、十一月十三日に石堀作業

を終え、以後十一月二十二日まで石 運び作業となる。参加者は十月中旬 頃から増え始め三〇人を超す日が幾 日もあるが、十一月十日以後は五〇 人を超え七、八、九〇人に達する日 も出てくる。最終十一月二十二日に は一三八人が参加している。 後半の石採取作業については、総 日数三五日、総人工(参加人数)千 七百六十二人、名前のわかる参加総 人数は百九十五人である。町人村人 の参加は、八月晦日会所に呼び集め られた庄屋はじめ町村役人である う。村名、人数の記載がなく、村役 人、町役人と記してある場合がある。 すべての村から出てきているのか、 どれだけの人が参加したのか明確に できないが、村役人にとっても義倉 の建設は、望ましいものだったと推 察される。また、赤羽根村・若見村 の庄屋組頭が足軽層と一緒に「御酒差加」に加わったのも彼らの 地位向上を象徴する。 蔵王山麓での石取り作業は、当初 少人数の限られた人達で進められた が、日を追う毎に多人数になり、ほ

ば全家中を巻き込むような大きな活 動となった。急な斜面の石を掘り起 こし、転がし、普請場まで運ぶのは 危険な作業でもあった。家中は、既 に長い年月、甚だしい儉約を強いら れており、不平不満も潜在していた と思われる。一緒に働き、酒を飲み、 粥をすすめることは家中のエネルギー を引き出し、一体感を強める役割を 果たしたと思われる。十一月四日条 に「渡辺登此度之御家中御手伝被及 感涙」と渡辺華山が手伝い作業の様 子を聞いて感涙したという記事があ る。 十一月十一日「昨日お手伝い場では追々寒気が強くなりお手伝いも難 渋となった。石の数も大抵足りそう だという。石垣積みも南側と東側で 先ず止める。」という年寄佐藤半助 の発言があり、十一月二十二日で石 堀・石運び作業は終了する。

『幽居記聞』と『守困日歴』(一)

―田原蟄居中の華山の覚書と日記―
研究員 別所興一

I 本書執筆の前史

―蛭社の獄から池ノ原の幽居に到る経過

天保十年(一八三九)五月十四日、華山は海外渡航計画・大塩平八郎との通牒・幕政批判などの嫌疑で、江戸北町奉行所揚屋入り(入獄)となり、同年十二月十八日、「幕政批判の罪により在所蟄居」の判決を受け釈放された。

翌十一年一月二十日、華山は松岡次郎(後年華山の娘婿)を指し添え人として江戸から田原へ護送され、しばらく松岡宅に留置された。その間は昼夜警護の宅番に監視されていたが、二月六日に宅番が解かれ、親類の雪吹伊織宅に移住した。同月十六日に藩から池ノ原の御産物屋敷(以前に農学者大蔵永常が居住)をあてがわれ、五人の家族と共に蟄居生活を送ることになった。敷地は千

五百坪もあったが、江戸育ちで野良仕事ができず、副収入もなかったの

で、華山一家の生活はたちまち困窮することになった。恩師の松崎謙堂に宛てた同年三月四日の書簡では、感謝の思いと共に、獄舎でかかった皮膚病がひどく床に伏せたまま左肘をついて執筆するという窮状を伝えている。また、「田原の地は34度半弱(緯度)で江戸より1度南に当たるが、西風が日々吹き抜け、寒暖の差が大きく凌ぎがた

い」とも記している。何人かの門弟や里人が時たま慰問してくれたが、絵を描いて売らなければ衣食にも事欠く窮状は変わらず、孤独感は深まるばかりだった。田原藩士と深い姻戚関係をもつ吉田(豊橋市)藩士柴田猪助(善伸翁)の同年六月十四日の日記に、「近日

田原にて発句に、田原にいらざる山が三つありと申す由、華山春山今一人は近年御抱へ儒者(伊藤鳳山)と申す」と書かれていることから、華山に対する藩内の風評が好ましからぬものだったことが知られる。

II 『幽居記聞』の成り立ち

この覚書は、ようやく一人で立ち上げられるようになった同年七月十一日に書き留められた。幽居の近隣で見聞した珍無類な出来事を、写生図を添えて説明している。

原本は華山の一番弟子の椿椿山の居宅に所蔵されていたが、現在は田原市博物館に寄託されている。この覚書の端緒の原体験については、同年二月二十八日付けの石村正次郎宛の書簡に、次のような記事が見える。

「此地は遠州大洋にさし出、島地の如く候ま、昼夜洪濤の声耳を驚かし、山は屋後より起り、猪兎の畑にかよひ、狐狸の厠に立てひとを驚し候など、耳目になれざる事共にて

御座候。尤奇なる事は、表浜と申右大灘に押出候処にて、蘆(水辺に自生するイネ科の多年草で、巨大な地下茎を持つ品種もある)の大き巨竹同様、径は一尺余有レ之もの流れ寄、又鳥賊の足共に大凡三間ばかりも有レ之、其甲六尺、子供の乗り候船に被レ用候程のものも捕り、又天津繩手(天津新田沿いの長いまつすぐな一本道。豊橋市杉山町のうち)と申所にて、城下片町(田原新町の龍泉寺と龍門寺へ向かう通り)之善九郎と申もの、遥なる山のはしにて灯のあるを見候処、右灯火忽数千之火と変来、

同人の後より何ものか抱き上て傍の川へ投込れ候。漸半死半生にてたすかり帰候よし、右は当月四日夜九時半(深夜一時)頃之事にて、右灯火は此地の名物にて竜灯(主に海中の燐光が灯火のように連なり現れる現象)と称、天狗(深山に棲息する想像上の怪物。人の形をし、顔赤く鼻高く、翼があつて羽団扇を持ち、飛行自在で神通力を持つという)の仕業と申伝候。かゝる事見聞仕候も、

遠くも来ぬる隅田川にて、さては都の空なつかしく、客散候後は家内打より袖ぬらし候事も有之、御察可レ被下候」

宛名の石村は、華山が蚕社の獄中にあつた際、揚屋（江戸伝馬町の士分格の未決囚を入れた牢屋）で相部屋だった人物のようだ。石村と親交のある江戸浅草の寺の住職がはるばる華山宅に慰問のため来訪し、石村や他の同囚の近況を伝え、江戸土産を届けたことに華山は返礼し、自分の近況を伝えるとともに、江戸文化と隔絶された華山一家の淋しい心境も打ち明けている。

しかし、華山は元来、幅広い分野にわたる旺盛な好奇心の持主だったから、世捨て人として幽居にこもることはできなかった。藩政や国事に参画できない不自由な境遇ながら、江戸とは異なる郷国田原の風物や人情を、心新たに観察し記録したいと考えるようになった。そのため当面は修身齊家と画作の大成に専念しようとして決意したようである。

Ⅲ 『幽居記聞』の原文①

「幽居記聞」の原文には、「庚子初秋十一日」（天保十一年七月十一日）

の年記があることから、華山は二月ころに田原で見聞した出来事を、この日改めて想起し、記録したことが推察される。江戸育ちの華山にとっては、特段に印象深い出来事だったようである。次に原文を紹介したい。

「御城下片町に善九郎といふ黄夫（棒手振りか）あり。ことし吉田に使にたのまれ、こ、かしこ用多くて、思はず日暮たれば、提灯をかりなどしてかえりをいそぎけれど、夜いたく深くて、丑刻（深夜二時）ばかりに天津繩手にか、れり。此繩手ハ凡一里ばかりもありて、南は田畑、北は入海にて、笠嶋（山）蔵王などいへる山々打めぐり、其麓に浦村（田原藩領。田原市浦町）、波瀬村（田原藩領。田原市波瀬町）などいへる所あり。

繩手よりハ海のわたり一里あまりもあるべし。近比こ、に沿ひ、新田

あまた開き、そのただ中を掘りて川となし水を落す。潮満れば人のたけを超え、ひける時も又乳に及ぶ。

此善九郎や道の半バ過し程、浦村のかたにひとつの燈見ゆ。此わたりあかしおける家ハあるまじ。或ハ漁の火ならんにハ、山にそひてあらんやうもなし。或ハ龍燈——三州の方言に龍燈といふハ夏秋の際、山海ヲ亘り、何ものとも審ならざる火燃る。其火形さまざまにて、或ハ大火珠の状をなして叢林にか、り、或ハ海中に浮ぶ。走る時ハ疾電（はげしい雷）の如く、止る時ハ懸鏡の如く、或ハ人を送り、或ハ人を威す。海に浮び川に出る時ハ、漁獵必なく、人を驚す時ハ山伏（修験者）の状をなすと云。此ものに逢ふもの草履をいただきて、其災をさく。——はグヒンサマ（天狗の異称）のわざと聞バ、時をさだめぬこともあなるものと、ひとり疑るに、其火俄に大きうなりて、入江を飛び渡るよと見しが、早後のかたに火然（燃）で、、其中より大なる男と覚へ、両脇より

手をさし入、胸のあたりをひそめて空に引揚られたり。肝もうせて物の覚もなくなり、せんすべなし。

や、ありて人ご、ちつきて目を開き見るに、数百の火球前後左右をかこみ、其身ハは川のただ中にうち入れられ、胸のあたり水にひたされ、ひへごこへ、息もつき得ず、声もた、ず、潮れ死なんとす。まことにおそろしといふも、あまりあることにて、又目を閉じ心に神仏をいのりつ、はふはふ（ほうほう）もとの繩手に這ひあがり、今田橋（蜷川にかかる。田原市豊島町）といふ所の、ひとつの家にとどりつきて、藁を焚き、身をあぶりなど介抱に逢ひ、かろうじていのちたすかりたり。

龍燈にあへるものは、提灯の火を消し、応ぜぬやうにすべし。此善九郎これをし（知）らで、災にあふたるなるべしと、このひとつ家のあるじなる金兵衛といふもの申たりと中村氏（田原藩医中村玄喜）の話なり。中村氏ハ善九郎が此後、や（病）めることあるを療治して直に打ち、た

る事なれば、空事にハあらじ。おのれも善九郎をよびて聞んとせしが、かゝる身の上なれば思ひとどまりぬ。——龍燈を見たる人ハ多けれど、まさしく奇怪に逢るはまれなり。

八九年前、吉田の医師浅井完晁（吉田下り町へ豊橋市花園町の医師。子の弁安は鈴木春山に師事し、西洋医学を学んだ）といふもの、御城下

十町（田原城下の萱町のうちか）の平野屋庄右衛門がもとに療治にまいり、酒いたくたう（食）べたれハ、

加（駕）籠にのりて帰るさ、また此繩手にて龍燈に逢たり。酔たるま、

に、おとに聞龍燈が神あらバこゝに來ませと呼ければ、忽飛びいたると

覚しが、あたらしき加（駕）籠の棒、中より折れてせんかた（詮方）なく

たちかへりたりと、鈴木氏（田原藩医の鈴木春山か）の話なり」

華山は十代から藩儒鷹見星臯や林家塾頭の佐藤一斎に師事して儒教古典を丹念に学習していたから、「子は怪力乱神を語らず」（『論語』）という儒教特有の価値合理主義を身に

着けていた。狐憑きや怨霊信仰などの迷信的な風説には一定の距離を置いてきたのである。

また、三十代以後は蘭学や洋画を学び、科学的合理主義に基づく世界認識に到達していた。例えば、天保

十年（一八三九）三月に幕府代官の江川英龍に依頼されて執筆した『初稿西洋事情書』では、「そもそも西洋の懼るべきは、雷を聞きて耳を塞

ぎ、電を忌んで目を塞ぎ候事を、第一の悪と仕候。ただ万物ばかり究理仕候にはこれなく、万事議論、皆究

理を専務と仕り候」と書き、西洋人の究理の精神が西洋諸国の富強の要因であると力説している。

この文書は、同年五月に仕組まれた畜社の獄の際に家宅捜査で『慎機論』と共に押収され、幕政批判の罪

科の証拠とされたが、華山はその後も西洋諸国の科学的合理主義に基づ

く世界認識を保持していたと思われる。それ故、城下片町の棒手振りの善九郎が田原藩東端の今田橋付近で見かけた龍燈や、吉田藩医の浅井完

晁が天津繩手近辺で目撃した龍燈の伝聞について、華山は驚嘆したものの、にわかには同調できなかったのではなからうか。

とはいえ、座学一辺倒に陥らず、自分が見聞した出来事を、好き嫌いの感情に囚われないで、ありのままに写真し、記録したところに、華山のリアリズムの精神が認められると言えよう。

IV 『幽居記聞』の原文②

「この頃日比（日出村。大垣新田領。田原市日出町）といふ浜にて、長さ六尺あまりなる烏賊を捕り得しと語り伝ふ。あるにも過ぎて人はいゝ、なすにやと疑ふに、十年前、小役人井上忠左衛門が浜役（漁村で浦方を管理する役職）とて、海辺非常を守り、また漁獵の目代（現地に派遣された代官）をもちかねて和地村（田原藩領。田原市和地町）に移り住みたる時、日出村にて漁夫ども網引きあげんとしたるに、海面俄二くろうなりて、雲霧の蒸しのぼるが如く、また石火

矢（江戸初期に西洋から伝來した大砲）といふものうちはなち、その烟の吹出るがごとく、これなんあやまりて龍神を引たりとて、人々氣もこゝろもそら（空）になりて、にげはしるもあり。肝ふときもの、みのこりて、やがてて（手）ひきあぐるに、大なる烏賊のくろみを吹きたるにてぞありける。その長、両鬚（動物の口ひげ）より尻にわたり、凡一丈二三尺ばかり、頂のほどハ赤うなりて、常のものといハいと異なり、甲

の長さ七尺、七八歳の童子の船とし、二三人ハ受るとぞ。此甲尾州古屋の人に売て、代十四兩を得たりと、此忠左衛門申き。されバ、此ごろかたり伝ふることも、そら事にあるまじければ、なをつ【ぶ】さにきゝて記しておくべし。——この事ひ（い）ひ出たれば、鈴木氏（鈴木春山）がいふ。三四年前、百々村（吉田藩領。田原市六連町）の海浜にて、よわりたる烏賊の、ただよひよれることあり。其土人（土着の住民）ひろひとりていだしあぐるに、鬚ハなる（ほ

地をすりて、あぐることあたはず。その長さ首より尾をかけ三尺余。髭ハこれに準ずべし。これを吉田の魚町（吉田城下二十四町の一つ。魚市場があった。豊橋市魚町）に持ちいたり、僅に錢五百（文）を得たりとぞ。されバ日出浜にて捕しも、必そら言にハあらじ」

地元の漁民にとつては、夕飯時の面白い話題にはなつても、つぶさに観察するには値しない情景かもしれない。しかし、江戸侍であった華山には、殊のほか印象深く感じられたためか、あたかも現場を目撃したやうなタッチで、日出村や百々村の浜辺に漂着した巨大な鳥賊の遺骸のよすをリアルに書き留めている。単なる一人物の思い出話ではなく、複数の人物の証言として再現されている。

徳川幕藩体制下においては、身分的規制が強かったので、武士が百姓・町人の肉声に耳を傾けたり、その噂話を記録したりすることは少なかった。華山は藩の上級武士の家に生ま

れたものの、青少年期の華山一家は極貧状態だったので、百姓・町人も平場で交際し、心を通い合わせるものが少なくなかった。そうした身分の枠組を超えた華山の生活姿勢を示す資料として、相州厚木方面を旅行した『游相日記』、桐生・足利方面を旅行した『毛武游記』、渥美半島沿岸の村々や神島・佐久島などを経訪した『参海雑志』などの紀行文がある。『幽居記聞』はその延長線上の覚書であることが知られる。

V 『幽居記聞』の原文③

「一、小塩津村（幕府、旗本諏訪氏・本多氏の相給。田原市小塩津町）の海浜に異なる蘆の一根五莖なるが流れよりて、其ところの獵師どもひろひあげたり。其大さは孟宗（竹の一種で最も大形。最も大きなものは高さ二五メートル、直径二四センチメートルに達する）といふ竹の大なるがごとく、末のかた皆おれて、長さハ六七尺もあらん。短きは三尺ばかり、こゝにハ見も及ばぬものなれど、

此わたりの人の家には往々持てるありて、其最大なるは、手盥（手や顔を洗うのに用いる小さなたらい）に作れるもあり。その大さ思ひやるべし。

此海ハ遠州大灘にて、洪波（大波）雲にまじはり、其かぎりしるものなしとは、赤道といふかたに近き南海の島々に生ひたるものにて、数千里の波を凌ぎ、ただよ（漂）ひいたれるならんと、しるものいへり。ことし正月はじめの事也。中村氏（中村玄喜）其一莖を求得て、送り示されたれば、写おきぬ。



莖周圍一尺 切口経（径）三寸 此莖ハ最小なるもの。ある人のもては周圍二尺に及べりと云。長四寸三分 切口一寸七分

小塩津村の浜辺に漂着した巨大な葦の莖について、華山は地元漁師たちの風説を耳にし、さらに知友の藩医中村玄喜が届けてくれた孟宗竹のような葦の一莖を観察した。精細に写生するとともに、それが赤道近くの南海の島々から数千里の波を凌いで漂着したものと推測している。

この華山の見聞は、それから五十八年後の明治三十一年（一八九八）に柳田（松岡）国男が、愛知県渥美郡伊良湖村の浜辺の散策で「椰子の実」を見つけた一夏の鮮烈な体験（『伊勢の海』、後に「遊海鳥記」と改題）に通底すると考えるのは、筆者の思い過ごしであろうか。

華山と母親栄について

研究会員 大崎 洋

『タテ社会の人間関係』を著した、文化人類学者の中根千枝は著書『家族を中心とした人間関係』の中で、社会における人間関係の基本は家族であり、特に母親の存在が大きいとしている。世の中の仕組み・構造変化が激しいとはいえ、子どもを優しい気持ちで可愛がり、子どもの状態に気を配り、無条件で守り育てるといふ母の姿、母の役割が、どんどん少なくなってきた。まさに、家庭の危機といえる状態である。しかし、いつの時代においても、母親は家庭生活の中心である。

華山の生きた江戸時代は、女性蔑視の時代であった。江戸時代の武家において、親子・夫婦・兄弟関係の中で最も重視されたのが親子関係である。

子の中でも特に家を承継し、家産を承継する跡継ぎの子には、単に親に対してだけでなく、祖先に対する孝行が強く要求され、祖先伝来の家を重視するのも武士道の特徴である。男子と女子は育児法からして異なる。

男子は勇氣ある武士に育てるために脅さず叱らず、年に応じて徐々に教え、親を主君に準じて仕える作法を習得させるのに対して、女子は真心の育成を第一とし、常に男子と距離をおい

て物見遊山や寺参りを禁じ、夫を主君と心得るよう教育すべしとされた。

華山の父定通は、後には藩の家老職である年寄役末席にあげられたが、華山が生まれた寛政五年は数え年二十九歳で、御使番格、仮御取次役、御留守居添役という役にあった。

一方、母は栄女といった。摂津国高槻の城主永井大和守の家臣河村彦左衛門の女であった。偉人の母は必ず賢母だというのが、栄女もまたその例に洩れなかった。貞順にして女丈夫の風があった。それだけ男勝りの勝気な婦人だったかと思われるが、年がたって気むずかしい姑によく仕えて、姑からも常に感謝せられていたという。栄女は感心な賢婦人であった。夜寝るのに布団を敷かず、夜着をかけることもなく、破れ畳の上にごろ寝をする程、忙しく勤勉な女性であった。

華山は長男で、弟が四人、妹が三人であった。祖母りんも健在だったから、合わせて十一人の大家族であった。父の定通が病身で、二十年の大病を患っていたから、家計は貧困を究めた。

天保九年、華山が四十六歳のとき、藩に、退役を願い出て、幼児からの生涯を追想したものが、『退役願書』である。

私母、近来迄夜中寐候に、布団と申すもの、夜着と申すもの、引かけ候を見及不_レ申、破れ畳之上にごろ寐仕、冬は炬燵にふせり申候。私親父大病故、高料の薬種・薬礼、日食之麵類等に事欠、畳立具之外、大低質物に置尽し、猶借財

親類共にも借尽し、僅南鐘一片之義にて母方身内之ものに山伏有_レ之、本所一ツ目に住居仕候方へ、母事唯今存生仕居候助右衛門と申弟を背負、雪中を侵し罷越、夜に入り候て、帰宅仕、其節私洗足之湯をわかし候とて、衣服をこがし、大にしかられ候義、干_レ今覚罷在候、乍_レ去老母義、右之通苦節を凌ぎ候故、他人之母とは拔群之勞、私ありて老後をも相養ひ候事、申迄にも無_レ之、干_レ然私一昨年より益疲勞仕。

華山の一番よわいところは、いつも老母のうへをおもう愛情の深さよりほかにない。

書簡には「老母事唯一刻も忘れ不_レ申」の語句が頻出する。母親は確実にその子の親であり、母系制の基盤である。

母親を大事にし、母を思う心は、日本の伝統であり、日本人としての心の基層・古層であり、美德ともいえる。母に対する思いは論語よりも深いところにある。

天保十年、獄中からの小寺市郎右衛門宛書簡には

老母事唯一刻も忘れ不_レ申、夜中毎に母を呼候とて同窓のものに被_レ笑申候。思ひ出候得ば、唯落涙のみにて、赤子の如くに御座候。私母を思ふこと如_レ此、母私を思ふことも又倍し可_レ申候。とある。

哲学者・教育者の森信三は「女性の特質は、素直さと優しさにあるといえる。優しさは我が子を育むその天性の使命からきている。女性の真の幸せは、子どもを生んで母親となり、母親

としての真の自覚に生きることにある。それ故、女性の女性たる所以は、母親になることによつて、初めてその成熟に達する。女性は「家庭における太陽」である。女性は「家庭」という王国にあつては、まさに太陽のように、全家族員の心を温め、その生命を育み育てること、あたかも太陽のようだというわけである。」としている。

そして、哲学者の梅原猛は、道德の根源は「母ごころ」にあるとしている。親の子に対する愛、特に母の子に対する愛はすべての動物の遺伝子の中に組み込まれているものであり、そのように自然に対する利他の心の子や孫にあるいは社会や国家や人類に及ぼしていくのが道德であるとする。

個人と社会の関係を重視する西洋の倫理学には、道德の源は家庭にあるという考えはほとんどないという。

お母さんは一切の欲望をおさえて自分を育ててくれた、そのお母さんに楽をさせてあげたいという気持ちが華山は人一倍強かった。だから一生懸命働く。一生懸命働けば、人に認められ、出世もする。出世するということは自分のためだけではない。家族に対する利他行でもある。働くということは本来、自利の行であることも利他行も含まれている。

華山は八歳より世子亀吉のお伽役として初出仕して以来、近習役、納戸役、御給人、取次役、側用人、年寄役と侍としてのエリートコースを

歩んだ。

道德の根本を自利利他の精神に求めなければならぬ。利他行の根本にあるものは、子に対する親ごころ、母ごころである。

そして、菩薩とは、「さとりを求める人」の意である。生命論からいえば自己の徳性を發揮して他に尽くそうとする生命状態をいう。菩薩は、修業の結果、悟りの境地に到達し、極楽の仏国土に安住できるのだが、苦しみ迷う衆生のためにあえてこの世に留まって、仏教を広めようとしている存在とされる。菩薩という言葉は観音菩薩・弥勒菩薩などのほか、大乘仏教徒のことでもあり、奈良時代には行基など、私度僧を含めて民間で崇められた僧を菩薩といった。

菩薩の道をゆく者は利他（他者のために）を志し、自分の安寧を求めることはせず、俗世間のわずらわしい生活に身を投じて、無知と愚かな執着のせいで三界を永遠に輪廻し続け、人間としての究極のゴールに向かって何の努力もしない大衆を救うため、全力を尽くすのである。出家せる比丘でも在家の国王官吏商人等誰でも、衆生済度の誓願を立てて利他行に邁進する人は菩薩である。菩薩は世間において活躍する。泥沼に咲く蓮華がけがれに染まることなく、清らかであるのが菩薩の姿であるといわれる。

そして、悩み多い生活をしている人々を教え導いて、そういう悲しい生活を脱出せしめたいとい気持ちで「慈悲」の心という。この慈悲の心持ちから世の中をもっと善くしようという決

心が生じ、そうして世の中を善くするには、自分に世の中の人を助け救うだけの力がなければ、助けたり救ったりすることはできないのであるから、自分の修業をもっと励んでゆきたいと思う。この考えにたつものが菩薩である。華山の母親はまさに菩薩といえる女性であった。

女性の社会進出により、男性と競う社会となり、本来の女性らしさを發揮できる場面が減ってきている。さらに、多様な価値観のの受容により母子関係が変質してきている。

歴史を学ぶ意義は、過去の人々の営みを参考にし、現在の生き方を見つめ直し、未来をどのように創造していくのかを考えることである。武士でありながら極めて貧しい家庭に育ち、その苦しみを身をもって味わったことは、封建的な身分制度を超えて、貧しい人、苦しめられている人への共感を育んだに違いない。

華山は近世日本が生んだ最も高貴な精神の持主であり、世界に対する視野をもった卓抜な文人画家であった。その華山を育てた栄は、母ごころに溢れた女性である。時代は違うが、母栄のどこまでも子どもを思う生き方に学ぶことが混迷の現代を救う道になることと思える。

主要参考文献

- 中江和恵『江戸の子育て』
- 森銑三『渡邊華山』
- 田村榮太郎『渡邊華山の人と思想』
- 石川淳『渡邊華山』

華山塾を開講

「田原から未来を拓く」
志の高いリーダーを育成

華山会では、華山神社奉賛会の協力の下、郷土の偉人「渡辺華山」の遺徳を継承するため、華山が日本を変えようと養才教化に努めたように、田原から未来を拓く志の高いリーダーの育成を目的として、令和6年8月4日華山会館で華山塾を開講しました。

○記念講演

華山塾の開講を記念し、開講式に先立ち、田原市出身で元大蔵官僚の杉井孝氏から「日本列島（日本）と世界」と題して講演いただきました。世界は今、国際紛争など課題が山積しており、戦前に戻りつつあると警鐘するなど、日本のあるべき姿を分かりやすくお話しいただきました。



記念講演会で講演する杉井孝氏

○開講式・第1回華山塾



挨拶する世話人代表石黒功氏

その後の開講式では、1期生24名を前に挨拶した世話人代表石黒功氏から、塾発足の経緯、塾長渡辺華山、塾是、塾訓の説明がありました。

特に塾是とした『和蘭陀風説書』の一節では、時代を生き抜く心構えを説いた「徳」の大切さや、百年先を見通す「百世」の重要性を強調し、塾訓の『八勿の訓戒』では、日々の心構えとして紹介されました。

塾生は、27歳から56歳までの市職員や市議会議員、JA職員や農業者、福祉医療機関の職員、地元企業の社員など、様々な分野の若手や中堅が中心となっており、任期は、1年。第1回目の華山塾では、市職員から「田原市の課題と総合計画」の講演があり、その後、塾生からは、人

口減少を要因とした関心事が多く寄せられました。

○第2回華山塾 基調講演

塾生が様々な課題を研究する上で、人口減少を詳細に分析する必要があり、11月25日の第2回華山塾基調講演会では、全国で活躍されている野村證券(株)金融公共公益法人部の和田理都子氏から「人口2/3激減時代と転換点を迎えた東三河、田原市」と題して講演いただきました。

この中で、人口動態や産業分析など、様々なデータを詳細に比較分析され、田原市の未来を模索していく上で、示唆に富んだ興味深いお話をいただきました。

その後、華山塾では、講師と塾生による質疑などが行われ、塾生はグループに分かれて、研究テーマなど話し合いました。



基調講演会で講演する和田理都子氏

○第3回華山塾



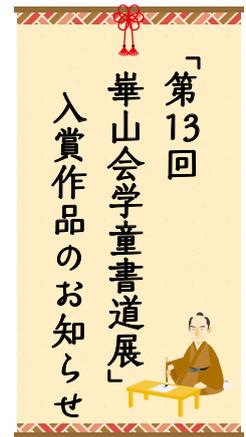
塾生に講演する戸田敏行氏

2月15日の第3回華山塾では、アドバイザーで愛知大学三遠南信地域連携研究センター長の戸田敏行氏から「越境する地域づくり〜こころ豊かな地方都市の再生〜」と題して講演いただきました。

縮減社会の中で、田原には華山から受け継がれた進取の気性があるので、歴史や自然を活かし、越境をキーワードとした地域づくりが大切とお話しいただきました。

その後、各班の課題研究の企画書に対し、アドバイザー等から質疑や助言がありました。

この塾生による自主的な課題研究は、8月に報告書としてまとめる予定です。塾生版の田原市の未来図が描けたらと期待しています。



公益財団法人華山会では、郷土の偉人渡辺華山の遺徳を学ぶ機会として、学童書道展を開催しております。田原市内の習字教室に通う小学生、中学生を対象に作品の募集をしたところ、小学生55点・中学生23点の応募がありました。応募総数78点の中から、優秀作品25点を選定し、そのうち特選作品4点をご紹介します。いただきます。

ご応募いただきました皆さんやご協力をいただきました習字教室の先生方に厚くお礼申し上げます。

公益財団法人華山会



中学生の部	高学年の部	低学年の部
〔入選〕 〔奨励賞〕	〔入選〕 〔奨励賞〕	〔入選〕 〔奨励賞〕
小久保実咲 大下 侑記 尾澤 怜奈	田中のどか 福井 真叶 島田 凌雅 岡田 かほ 柳田 侑希 住友 華 佐野 栞 林 星那 渡會 彩太 鈴木 那実 永井 逸晴	小川さくら 長尾 英伸 豊岡 杏菜 野間 蓮 野間 那月 松浦純之助 小久保晴海



公益財団法人華山会からのご案内
華山会館フリースペースのご案内

日頃は、華山会館をご利用いただきありがとうございます。

華山会では、画家としても活躍した田原藩士渡辺華山の功績を後世に伝え、地域の芸術文化の発信基地として華山会館を活用し、これまで30回に渡り、市民等の皆さんの絵画や書などを集めた「華山会新春美術展」を開催してきました。

四月一日からは、華山会主催による新春美術展としてではなく、華山会館ロビーや喫茶室などのフリースペースを活用して、絵画・書などの展示を行う団体やグループの方々に、場所を提供しますので、ご応募ください。使用料は不要です。

ホールなど会場利用者の方々の調整もありますので、詳しくは、華山会事務局にお問い合わせください。皆様の活用をお待ちしております。



華山会新春美術展の様子

平年六年度華山・史学研究会研修視察

茨城県水戸市を訪ねて

平成六年度華山・史学研究会の視察は、十一月二十二日（金）、二十三日（土）の一泊二日で行われました。初日二十二日は、大相撲高安関の出身地である土浦市、二日目は幕末尊王攘夷の中心となった水戸市を訪ねました。参加した会員は、石川洋一・大崎洋・加藤克己・柴田雅芳・鈴木利昌・縦山伸次の六名で、平均年齢七十歳超の健脚揃い（？）で移動は、タクシーなしの強行軍でした。

初日八時五十分豊橋駅を出発、東京駅を経て十一時四十五分に土浦駅に到着。駅を降りて驚いたことは、駅と市役所が陸橋で繋がっており、生活が実にコンパクト化されていることです。

もう昼近くなっていましたので、駅近くのそばや「一成（いちなり）」で天井とせいろセットの食事をとります。

その後、最初の目的地は田原市博物館と交流のある土浦市立博物館に移動します。日本で二番目に大きな湖の霞ヶ浦のそばにあります。土浦市立博物館前には、室町時代後期に築城された土浦城の本丸・二ノ丸跡の一部が亀城公園として整備されています。博物館は昭和六十三年の開館以来、土浦の歴史・文化を紹介しています。一階には「大名土屋家の文化」のコーナーがあり土屋家ゆかりの刀剣・茶道具などを鑑賞しま

す。二階は「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」のもと、土浦のあゆみを紹介されています。

その後、曹洞宗龍寺、土浦藩の藩校「郁文館」の正門（現在は土浦第一中学校の正門）を通り、かつての呉服の老舗、土浦まちかど蔵「大徳」に向かいます。まちかど蔵は、旧水戸街道沿いに建てられた商家。商家の暮らしに関連する資料展示を見た後、その奥に併設されたレトロ感溢れる喫茶「蔵」でコーヒータイム。

また徒歩で土浦駅まで移動します。そして常磐線で水戸駅に到着、水戸駅も陸橋を経た向かい側に市役所があり、土浦と同じ機能的なコンパクト化な造りでした。到着後、駅構内の観光案内所で情報入手し、タクシーで宿泊先のリバーサイドホテルに移動します。近くの居酒屋「福」で太平洋産の刺身各種を堪能、腹一杯となり、旅の疲れを癒しました。

第二日目は、日本三大名園の一つ、春の梅満開の時期が絶景といわれる偕楽園から見学します。偕楽園東門から入って直ぐそばにある水戸光圀（二代藩主通称義公）、徳川斉昭（九代藩主通称烈公）を祀る常盤神社があります。偕楽園の名称は、孟子の「古の人は民と偕（とも）に楽しむ、故に能く楽しむなり」という一節からとったものです。

斉昭撰文の「偕楽園記」には、「是れ余（斉昭）が衆と楽しみを同じくするの意なり」とあり、藩主や藩士のみならず庶民にも開放する目的を掲げた近代の公園に近い性格をもつ庭園です。

次に好文亭に向かいます。斉昭がその位置や意匠について定めたといわれ、偕楽園の創設と

同時に建てられ、好文亭の名称は梅の別名「好文木」に由来あします。「好文」とは学問を好むという梅の異名で木造二層三階建て、斉昭が別邸として、また藩内人々と偕に楽しむ場として建てたもので、人々が学問や武芸に励むかたわら、ここで心身を保養するという斉昭の想いから命名されました。三階の楽寿楼から千波湖が一望でき、まさに絶景といえる景観です。

そして、茨城県立歴史館に向かいます。ここでは開館五十周年記念展が行われており、注目のは「立原軒翠像稿」です。儒学者立原翠軒は、



好文亭三階楽寿楼から



茨城県近代美術館前



水戸城大手門入口裏

天明六年から十七年間、彰考館の総裁を務め、光圀の死後、停滞していた『大日本史』編纂事業を再び進めた人物です。翠軒の息子立原杏所が渡辺華山と親交のあったことからこの絵を描きました。

杏所は、華山の「心の掟」に益友として挙げられている水戸藩の画家です。華山は描かれる人物の思想や精神を伝えるために「似ていること」を重視しました。縦三十センチ、横二十八センチのサイズにはおどろきましたが、リアルな絵が印象に残りました。

次の目的地は茨城県立近代美術館です。

延々と続く道のりに「タクシーを呼んでくれ」という悲痛の声飛び交いましたが、やっと思いで美術館に到着しました。まずは、館内にある、お洒落なレストラン「プティ・ボウル」で昼食後、開催されている「没後百年 中村彝（つね）展」を鑑賞しました。中村彝は水戸市出身天折の洋画家です。展示は、Ⅰ士族、書生、Ⅱ「新進洋画化」時代、Ⅲ中村屋と彝、Ⅳルノワールの衝撃、Ⅴ下落合のアトリエから、Ⅵ死を超えて―歴史に生きる―、に区分されています。

画業の多くを病床に過ごしながらも、新たな知識を貪欲に吸収していた彝の業績が良く理解

できました。

さらに、弘道館へと向かいます。斉昭の発意により、藤田東湖や会沢正志斎（伯民）らの意見を用いて創立された藩校で、田原の藩校成章館創設から遅れること四十九年、天保十二年に創設され、多くの人材を教育して後期水戸学の中心となりました。徳川慶喜は五歳まで英才教育を受けました。弘道館の教育は、西洋列強のアジア侵略が激化するなかで、国家民族の存立を第一に考えなければならぬという非常な事態に臨んで行われていたために、国防軍事に関する面の教育が重視されていた感もなくはない。当時列強のために、支配を受けていたアジア諸国の中で、日本のみその難を免れ、明治維新の意業を達成し得たのは、水戸学を根本とする思想によるところが大きい。弘道館の教育の根本は、どんな時代にも必要な人間の理想を達成しようとするところにあったことが、今回の弘道館訪問で理解できました。

最後に水戸城跡を見学した後、水戸駅から帰路につきました。

渡辺華山の交流のあった人物の記念館を訪ねての視察でしたが、歴史の重みを感じさせる旅となりました。そして、水戸では、道を聞けば親切に対応してくれ、温かい印象を受けました。かつて、吉田松陰をはじめ多くの来訪者が感嘆した、水戸人の懇切丁寧腹藏なき応対ぶりが現在にも息づいていることを実感しました。

研究会員 大崎 洋

公益財団法人華山会
田原市博物館 からのご案内

田原市博物館展覧会のご案内

八月二日(土)～九月二十八日(日)

昭和が始まって一〇〇年、

戦争が終わって八〇年展

昭和時代に巻き起こったうねりとその間に起きた戦争は、渥美半島に住む人たちの生活や、人生そのものにもいやおうなく大きな影響を与えました。市内に残る物や紙の資料からそのありようと変化を振り返ります。



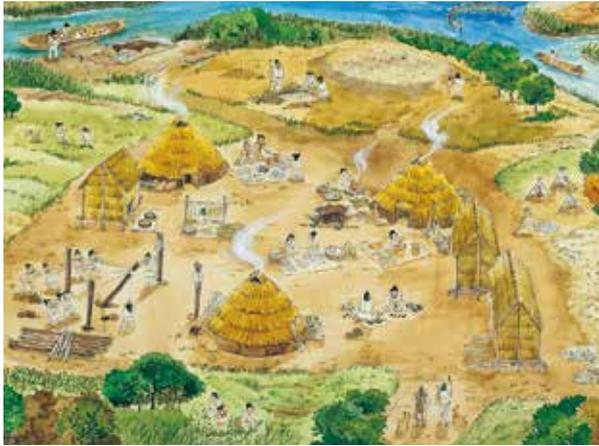
ラジオ 昭和時代中期

十月四日(土)～十一月三〇日(日)

企画展

渥美半島貝塚展

全国的に有名な渥美半島の貝塚。三〇〇年あまり昔の私たちの祖先の生活の知恵や工夫を最新の成果をもとに展示します。日本一のマツチヨマン縄文人をはじめ百年ぶりに渥美半島に里帰りする資料もあります。



縄文時代保美貝塚風景復元図

【企画展イベント】

詳細はホームページをご覧ください。
・ギャラリートークなど

渡辺華山の生涯と作品

常設展示室では、渡辺華山の生涯を常時紹介しています。

また、特別展示室では、華山やその師友、弟子等の作品を随時入替えながら展示しています。

観覧料

企画展開催時

渥美半島の縄文貝塚展

- 一般 七〇〇円(五六〇円)
- 小中生 三五〇円(二八〇円)
- その他 一般 三一〇円(二四〇円)
- 小中生 一五〇円(一二〇円)

()内は二十人以上の団体料金

東三河在住の小中学生は、ほの国こどもパスポート提示で無料。

休館日 毎週月曜日(祝日の場合はその翌平日)、展示替日

(公財)華山会から

講座「渡辺華山を知るために」

毎月十一日午前九時から

華山・史学研究会会員募集中

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加できます。

渡辺華山史跡巡りガイド養成講座

毎月一回程度

申込場所 華山会館事務室

華山会報 第五四号

令和七年四月十一日発行

編集発行 公益財団法人華山会

理事長 鈴木 愿

常務理事 林 勇夫

〒四四一―三三二―一

愛知県田原市田原町巴江一二の一

TEL〇五三一・二二・一七〇〇

FAX〇五三一・二二・一七〇一

編集協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 鈴木利昌

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。次回発行予定 令和七年十一月十一日